

トンナガ・チヨロー先生

今年は大宰府市市制施行30周年の年でした。3年後の平成27年はまた、大宰府町・水城村の合併から60年という節目を迎えますが、現在私たちが利用している市の庁舎はそれから30年前、合併から30周年に当たる昭和60年に開庁しました。利便性の追求と同時に「歴史とみどり豊かな文化のまち」のイメージを体现

した空間設計で、「塙」を模したタイルを施し、政庁風の柱が立つ正面玄関を入ると、ロビー右側に掛かる壮大な木彫壁画「西都大宰府」(筑紫美術協会作)が来庁者を迎えます。

在りし日の大宰府政庁の前面には「大陸文化の到来を表す波」があらわれ、「新しきものと古きよきものの調和」という新庁舎のコンセプトにふ

さわしい構図です(『市政だより大宰府』)。監修は富永朝堂(とみながちやうどう、1897-1987)。筑紫美術協会の初

代会長であり、「木の中に棲む彫刻家」とも呼ばれた木彫の大家です。「これは後世に残るものだから、材料は最高級品を使え。足りん分は俺が出す!」

という朝堂の心意気の下、木材は檜と樟、金箔は京都二条城と同じものが使用され(大宰府市文化ふれあい館編『彫聖―富永朝堂生誕百年記念

展―)、1月4日の開庁式では、最上の仕上がりを見せた作品が皆に披露されました。

朝堂は博多の生まれ。本名は良三郎。18歳で山崎朝雲(やまざきあそらうん)に弟子入りし、22歳で師匠から朝堂の号を受けます。

4年後に独立してからは、美術界の登竜門であつた帝国美術院展覧会(帝展)等で活躍を続けますが、

昭和19(1944)年、47歳のときに東京から疎開、観世音寺の寺務所に仮住まいを始めました。昭和62年に90歳で没するまでそのまま大宰府にとどまり、この地域の芸術振興に尽力します。また観世音寺の復興や学業院中学校の開校といった、大宰府の歴史文化や教育を培う運動にも多く関わっており、博多っ子気質

大宰府人物志

資料室だより ⑦8

で気さくな人柄の朝堂は、求められれば惜しみなく記念作品を提供しました。周囲の人たちは彼のことを、親しみのこもった博多訛りで「トンナガチヨロー先生」と呼んでいたそうです。大宰府天満宮の「御神牛」をはじめ、大宰府では現在も、チヨロー先生の作品をごく身近に鑑賞することができます。